

たことを覚えている。それからいくらかもたないうちに、隣村の金折で堤防が切れたということを知らされた。堤防で様子を見ていた人が、みるみる水位が下がった、どこか切れた、と感じたと言う。もしそのままふえ続けたら、自分達がいる所が切れたかもしれないと言われるほどでした。上級生と一緒に金折の決壊現場へ見に行った。その時はすでに30m位切れていたように思う。向こう側の堤防は断崖状に崩れ落ち、新しい地肌を剥き出しにしていた。濁流が渦を巻き流れ入っていく。数秒おき位に2～3mもある土砂が崩れ落ち、パターンという音だけを残して何の変化もなく濁流に吞み込まれていく。先方を見れば泥海だ。家の囲いのまきの木々が傾きかけ、高めの場所に建っているであろう白壁の蔵と思える建物が、泥海の中に異様に見えた。みんなどうしているのだろう。逃げられたのかなあ… そう思いながら、その様子を遠巻きに見ていた私は、足がガタガタ震えてしばらく歩けなかったことを今もはっきりと覚えている。

昭和25、26年西派川は建設省(現・国土交通省)による締め切り工事が行われた。それから佐久間ダムを初めいくつかのダムが築かれ、台風シーズンになっても鶴見、下飯田、新貝、大塚の各地区は、当時に比べればはるかに安心した日々が過ごせるようになった。

昭和53～55年度 芳川分団長 磯部馨

思えば昭和20年10月、幾日も幾日も降り続いた雨は、ついに天竜川を濁流の海に化し、鶴見地域においては庭先に漏水が始まり、半場地区今の材木町地域では堤防崩壊寸前になりました。こうした時点において金折地域も堤防決壊の危険を知り、補強用の畳の搬出をふれ回りましたが、時すでに遅く夕闇せまる頃、あえなく決壊してしまいました。

見る見るうちに床下に濁流が押し寄せ、取る物もとらずあえず上に逃れる始末でした。暗黒のかなたに流されていく牛の悲しい鳴声、もっともっと弱々しい流されて行く

人の助けを呼ぶ声。しかしそれに対して何一つしてあげられない我々。思うだに悲惨な事でした。

何十年に一度という記録的な降水量には、いかに人間がその場において立ち向かって、その自然の持つ偉大な力を防ぐことはできなかったでしょう。しかし、あの様な悲しい災害に二度と合うことのないよう、私達水防に携わった者をはじめとして、後進の団員諸氏にはより一層の努力と関心を持って、水防活動に励んでいただきたいと思います。またそれらの活動が、全市民の水防に対する関心度の高揚につながっていくことを望んで止みません。

昭和54～55年度 河輪分団長

昭和56～57年度 副団長 鈴木長男

私は浜松市水防団に20年間在籍させていただき、さまざまな出来事に遭遇してまいりました。その間痛切に感じましたのは、水防活動がいかに重要かということです。現在は情報化の発達によりまして相当のことまで現状の把握ができ、それなりの対応ができて、我々市民の安全を図ってくれております。しかし最終的にはテレビ、ラジオの情報をもとにしながらも、各分団が管内をよく巡視し、現状を確実に把握し、それなりに対応した処置を施して地区住民の安全を守ることが、水防団の使命として一番大切なことではないかと思います。

私は過去、大雨により天竜川が増水し、金折町地先において堤防が決壊し、大洪水に見舞われた経験があります。私の家の決壊場所と1.5km位離れていますが、上流の方が何となく全体的に白く見えてきたので、これは大変だと家族全員で畳を上げ、床に台を作り様々な家財食料を積み上げ、対応している間にも床下浸水してきましたが、それでもなお一つでも多くと荷物の積み上げをしたものでした。午後9時頃だったと思いますが、増水もどうか峠を越しましたが、前年の昭和19年12月の東南海地震で、地面に細い亀裂が数多くできていたので、そこより泡がブ

クブクと出たりして一層不安がありました。幸い私の家は畳を上げた後の床板の上を歩くと床板が水面にピチャピチャと漏れる程度でしたが、屋敷の低い家などは床上30cm、50cmと浸水した家も相当数ありました。その年は畑作物は全滅し、稲も何日も後に膝まで水につかりながら一株一株刈り取りましたが、半分は発芽してだめでした。

このような経験もしましたが、40年余りの現在は(昭和63年時点)、堤防も立派になりました。また水防体制も確立され、器材や資材も整備され、団員各位も毎年演習を積み重ね、各工法を習得してまいりました。このような現在の水防団があるため、河川流域に住む私達多くの住民としましては、安心した日々の生活ができることを、心より感謝するものであります。

出典：浜松市水防団25周年記念誌
昭和63年1月 浜松市

「暴れ天竜」災害の記録